

「フィンランドの小学校教育におけるスピリチュアル・エデュケーションの理論・実証的考察」

山田 真知子*

1. はじめに

今日、教育現場での学力低下、不登校、いじめ、自殺などの問題が、社会的な問題として大きく議論されている。これに伴い、学校教育での「生きる力を養う教育」「いのちの教育」の重要性が強調される一方、これまでのゆとりの教育から「学力向上」を重視する方向に転換すべきだという議論も高まっている。しかし、「生きる力を養う教育」「命の教育」は「学力向上」と必ずしも分離・対極するものではなく、「豊かな人間性」を目指す総合的な教育の中に構築することが可能である。近年「生きる力を養い、豊かな人生観を築くことを目的とする教育」が問われるようになり、欧米で行われているスピリチュアル・エデュケーションと対比しつつ、宗教教育が行われていない日本人の感性に添うSEを開発しようとする研究が行われている。そこで取り上げられるスピリチュアル・エデュケーションとは、人格教育、倫理教育、人生についての教育、いのちの教育（生と死、先祖について、死後の世界について、悲嘆教育、自殺予防、食育等も含む）、瞑想、自己に対する自覚、他との共感性と関係の構築、コミュニケーション教育、日本の伝統の「道

（武道、作動、書道等）」に該当する幅広い内容を包括するものである¹。

そこで、本稿では、フィンランドを取り上げ、フィンランドの義務教育（小学校）において、どのような内容の「生きる力を養い、豊かな人生観を築くことを目的とする」スピリチュアル・エデュケーションが教育の中に組み込まれているか、そしてその目標は何かについて考察する。フィンランドを取り上げる理由は、①フィンランドが北欧型福祉国家として手厚い社会保障のみならず、小学校から大学まで無料でかつ柔軟な教育サービスを提供していること、②国が、それらの社会保障政策と教育政策を、グローバル化と高齢化が加速する世界におけるフィンランドの競争力の根源として位置づけていること、③その成果として、フィンランドの青少年の学力レベルの傑出した高さがOECDの調査で示されているからである²。

筆者は30年間フィンランドで生活してきたが、フィンランドの教育現場では、生徒がものごとを自分で考えるような教育がもっとも重視されていることを見てきた。生きる力を養うということには、自分と自分のまわりについて考え、自分の意見を持ち、他人の意見を尊重するコミュニケーション能力を養うこ

*浅井学園大学人間福祉学部生活福祉学科

とも当然ながら含まれ、それが思考する能力となり、基礎学力として培われていくのは自明のことであろう。

それでは、フィンランドの小学校では児童の生きる力を養成するためにどのようなスピリチュアル・エデュケーションが行われているのか、以下に検討することにする。本研究は、ヘルシンキ市立メイラハティ小学校の校長とスピリチュアル・エデュケーション担当教員からの聞き取り調査、スピリチュアル・エデュケーション用の教科書およびヘルシンキ市の教育指導要綱から知見を得ることで行われた³。

2. フィンランドの小学校教育のしくみ

はじめに小学校教育のしくみについて概略を述べることにしよう。

地方分権が進んでいるフィンランドでは、教育の権限は地方自治体にあり、実際の権限は学校、すなわち校長に大きく委任されている。義務教育は昼食も含めて無料であり、教材も支給される⁴。ヘルシンキ市では、1～2年生については1学級生徒25人を限度とすることが奨励されている。3年生以上の高学年については、以前は32人を限度としていたが、今日ではその制限は緩和されている。授業時間は1～2年生は週20時間、3～4年生は24時間、5年生は26時間、6年生は25時間であり、5年生と6年生の授業時間数は反対（5年次に25時間で6年次で26時間）にしてもよいことになっている。登校日は月曜日から金曜日までで、土曜日は休日である。年間に190日の登校日があり、新学期は8月の中旬から始まる。夏休みは6月1日から8月の

中旬までの2ヶ月半近くあり、そのほかにクリスマス休暇、2月の冬休みがあり、学年が終了するのは5月末である。1～2年生の担任は低学年専任の教員がなり、3年生からは担任と専門科目の教員から授業を受ける。

小学校における最も重要な教育方針としては、①競争をさせない、②平等を強調し、弱いものを大切にする心を養わせる、の2点があり、これはフィンランド全体の小学校でも心がけている共通事項であるといえる。一方、教育における今日の問題としては、テクノロジーの発達によって、子供が自分の部屋のコンピューターやテレビに没頭し、家庭生活に参加することが少なくなった傾向があるということが、聞き取り調査より判明した。また小学校においていじめはさほど深刻な問題ではなく、日本のような小学生のいじめによる自殺はフィンランドでは聞いたことがないということであった。

3. フィンランドのスピリチュアル・エデュケーション

それでは、フィンランドのスピリチュアル・エデュケーションの内容を検討しよう。はじめにその意義について検討し、次に教育と宗教の関係について述べる。

3-1 スピリチュアル・エデュケーション（以下SE）の目標

フィンランドにおけるSEの目標は、生徒が自分の人生を肯定的に建設していけるように成長し、社会の中で自分の意見を述べ、かつ自分とは違う他人の意見も受け入れるような人間に育つことを目標としている。フィンランドがこの教育に力を入れる背景には、長

い伝統を持つヨーロッパ諸国に共通のキリスト教の影響と、戦後に発達した人道的な社会の構築を目指す北欧型福祉国家の理念の影響がある。さらに、現実の問題として、グローバル化する国際社会の中で生きていかなければならないことがある。具体的には、2000年にフィンランドがEU（ヨーロッパ連合）に加盟した結果、EU内、またはEUと関係する国々との人的交流や移動が活発になったこと、これまでにベトナム、ソマリア、ロシアなどから移民を受け入れたこと、また少子高齢社会では今以上に移民を受け入れる必要があること、または外国からの労働力に頼らざるを得ない状況になりつつあること等があげられよう。そのためにも、社会の中で自分を表現し、他人とコミュニケーションをとる能力を持ち、多文化、他民族を受け入れることのできる国民を育てることが重要視されてきたのである。

また、フィンランドは1980年代後半に自殺率がヨーロッパ諸国で1, 2位を占めていたことから、自殺予防のための国家プロジェクトを立ち上げ総合的な社会政策に基づいた対策をとり、10年後に自殺を減少させた実績がある。このプロジェクトにおいて、フィンランド文化をより寛容なものへと変容させ、社会が他人の絶望に無関心でなく、市民が周囲からのサポートを受け易い社会を構築しようとする努力が払われたのである⁵。フィンランドのSEの充実は、ヨーロッパのキリスト教の教えや人道主義の伝統を引き継ぐだけでなく、まさに今日的な状況の要請に教育面で応えるものでもあるといえよう。

3-2 宗教と教育の関係

フィンランドの国教は、他の北欧諸国同様、福音派ルーテル教会であり、国民の83.1%（2005年）が福音ルーテル教会に所属している。教会に所属している国民の戸籍は教会が取り扱う。このように国民の大多数がルーテル教会に属しているが、それ以外にも、ギリシャ正教会に属している市民は1.1%、その他の宗教（主にイスラム教）に属している市民も1.1%で、どの宗教にも属していない市民は14.7%である⁶。つまり、フィンランドではキリスト教会がスピリチュアル・エデュケーションを担っているといっても過言でないであろう。しかし、フィンランドは、他の北欧諸国同様、北欧型福祉国家の基本理念としての公正さ、平等を重視する国である。そのため義務教育では宗教（キリスト教）の授業が必修とされているが、キリスト教以外の宗教（教会）に属している、あるいは教会に属していない生徒のために、それに代わる必修科目が用意されている。すなわち、スピリチュアル・エデュケーションとしては、教会の行う宗教教育⁷（以下UT）と宗教色のないET⁸の2種類があり、どちらかを選択するようなくみになっている。

UTは福音派ルーテル教会の指導に基づく教科であり、ETは直訳すると人生哲学、人生の見方というようになるが、おそらく日本の義務教育では道徳、倫理学に近いものと考えられよう。選択の条件としては教会に所属している生徒は、前者を選択することが義務付けられているが、キリスト教会に所属していない児童はUTとETのどちらを選択してもよいことになっている。選択の割合は、全体として教会に属している生徒がどの程度存

在するかによるが、調査を行ったヘルシンキの小学校の場合では、UTを選択する児童は85～90%であり、ETを選考する児童は10～15%であった。

この小学校の他人種の生徒数の割合は約15%（40～50人）であるが、そのうち片親がフィンランド人である生徒は10%である。父親が外国出身であっても国籍はフィンランド人という場合もあるので、生徒の国籍について正確な把握はできない。また親から子への文化の継承の度合いは個人差があると考えられ、しかもヨーロッパ人とその他の地域では大きな差があると思われる。しかしながら、信仰については、親は普通、自分（特に母親）と同じ教会（宗教）に子供を登録すると考えられるので、ETを選択する児童は、キリスト教以外の宗教（たとえばイスラム教）を信仰する家庭の子供と、明確な意思で無信仰を方針とする家庭の子供であると考えられる。親が希望し、3人以上の生徒がそろえば、カトリック、ギリシャ正教、イスラム教のUTを受けることができる。また学校では、朝のキリスト教の朝礼、教会のサービス等に参加しない生徒に対しては、同じように倫理的な価値観を考えるような行事を提供することによって、それらの生徒の精神的な発達を支えるというしくみになっている。

4. UTとETの授業の実践内容

UT・ETの授業は小学校1年生から6年生まで実施され、1年生から3年生と4年生から6年生の二つのクラスに分けられ原則として3学年合同で行われることが多いが、高学年になると例外がある。1年生から3年生まで週1時間、4年生と6年生は2時間、5年

生は1時間となる。4年生と6年生の時間数が多いのは、年齢的に一区切りと考えられるからということだった。また1年生から6年生まで合同で課外授業を行い、博物館などを見学することも組み込まれている。授業の目標、内容は以下に述べるが、授業の目的としては意見を述べる、意見を聴く、ゆったりと会話を行い、コミュニケーション能力を養うという訓練を重視している。上級生は、調査することを学ぶことも、主要な目的となっている。本研究では、宗教に基づくUTは省き、日本のスピリチュアル・エデュケーションのあり方に対応するET教育を取り上げ、その目的、内容、実施方法を検討することにしてしよう⁹。

4-1 ETの目的

指導計画によるとET全体の授業方法、評価、目標は以下のとおりである。

授業方法：会話と様々なテーマによる学習とプロジェクトを中心とする。教育計画にある課題を深めるために、訪問または講師による学習を行う。

評価：評価を行うことによって、生徒が自分の意見をしっかりと表現できるようにし、かつ他人の見方も受け入れるように支援する。評価を行うことによって、一緒に考えることに参加する意欲と会話能力を上達させることに力を入れる。

目標：目標としては、生徒が自分の人生観を形成することを支援する。生徒の自我の良好な発達を

促し、そうすることによって他人や環境に対して肯定的な態度を形成できるようすることがその根拠である。

1 - 2 年生の授業および 3 - 4 年の授業は
①人間と世界、②人間関係と道徳的な成長、
③自我と文化アイデンティティ、④社会と人権、の 4 項目に分けられ、それぞれに目標と主な内容が設定されている。

5 年生も上記と同様の 4 項目に分けられているが、その他に学年終了時の生徒の成長に

ついても目標が定められている。6 年生については、1 年生～5 年生とは異なり独自の授業内容の項目が設定され、さらに生徒の個々の能力についての目標も定められている。これらを、それぞれ 1～4 年生、5 年生、6 年生の順に表にまとめて見ることにしよう。

4 - 2 1 年生から 4 年生の ET

1 年生から 4 年生までの ET 授業目標と内容を項目ごとに簡潔にまとめる。

	1 - 2 年生	3 年生	4 年生
人間と世界	<p>目標： 生徒が自然と環境を大切にすることを学ぶ。 ②動植物を保護し、命がかけがえのないことを学ぶ。 内容： ①動物・植物とは何か ②異なる環境 ③地球と宇宙 ④出生、自然における生と死</p>	<p>目標： ①生徒が宇宙における人間と地球の地位について理解する 内容： ①地球と宇宙 ②自然の中の季節</p>	<p>目標： ①生徒が世界の誕生についての物語に親しむ。 ②生徒が自然の保全に対する人間の活動の影響について理解する。 ③神話について学ぶ。 内容： ①世界の誕生のものがたり ②自然を破壊する要因 ③何に影響を与えることができ、何に与えられないのか ④神話</p>
人間関係と道徳的な成長	<p>目標： ①生徒は正しいことと間違っていることについて考えることによって、人生観に係る要素を学ぶ。 ②生徒が会話に参加し自分の意見を述べ、他人の言うことに耳を傾けることを奨励する。 内容： ①童話の内容で何が正と悪か。 ②家族、学校、自然等で何が良いものか。 ③正しいことと間違っていることをどのように見分けるか。 ④どのように意見をまとめ、勇気を持って建設的に表明できるか。</p>	<p>目標： ①生徒が善悪の行動の理由とその結果について、また他人に気を配り助けることの影響について比較し考える。 ②生徒が友情の意義を理解する。 内容： ①何が正しい、または間違っている行動なのか。 ②助けるということは何か。 ③正直さとは何か。 ④友情について考える。</p>	<p>目標： ①生徒が公正さ（遵法）とその欠点について学ぶ。 内容： ①日常生活における公正さ ②世界における公正さ ③世界の貧富</p>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">自我と文化アイデンティティ</p>	<p>目標： ①生徒が自分の文化と他の文化を知り、大切にすることを学ぶ。 ②いろいろな感情を持つことを知り、それを受け入れることを学ぶ。 内容： ①人間の外見－私はどのように見えるか。 ②人の特徴－私はどんな人なのか。 ③異なる感情－人はどんなときに嬉しくなったり、悲しくなったり、怒ったりするのか。</p>	<p>目標： ①生徒が人間を離反させる、または統合させる事柄について学ぶ。 ③生徒が違いを受け入れることを学ぶ。 内容： ①なぜ自分は皆と同じようにフィンランド人なのか。または皆と違うのか。 ②身近なところでの異なる人達との出会い</p>	<p>目標： ①生徒が異なる文化と習慣を理解することを学ぶ。 内容： ①フィンランド国民の中の文化的マイノリティ ②異なる国の子供の生活 ③異なる生活習慣 ④異なる生活習慣に出会うこと・多文化ということ</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">社会と人権</p>	<p>目標： ①生徒が自分とほかの人たちの文化や特徴があることを理解し、尊重することを学ぶ。 ②生徒が異なる家族がいることを理解し、自分の家族の中で建設的に行動することを学ぶ。 内容： ①私の家族といろいろな家族 ①家族のお祝い ②良い学級・学校とはどのような学級・学校なのか。 ③なぜ学校に行くのか、すべての児童は学校に通うのか。 ④フィンランドと他の世界における児童の地位</p>	<p>目標： ①生徒が自分の行動が環境に与える影響を考えることを学ぶ。 ②生徒が人間の営みの中で法・規則の重要性を理解することを学ぶ。 内容： ①契約、約束、信頼、正直さ、真実、嘘、裏切り等とは何か。 ②規則とは何か。</p>	<p>目標： ①生徒が児童の権利を知り、それが世界の国々でどのように実現されているかを比較する。 内容： ①児童の権利がフィンランドと他国でどのように実施されているか。 ②公正さと法律</p>

4-3 5年生のET

期待される成果が明示されている。それらを

5年生になると、授業目標と内容のほかに

以下にまとめてみよう。

	目 標	内 容	期待される成果
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">人間と世界</p>	<p>①生徒が異なる環境団体について学ぶ。 ②生徒が持続する開発ということの内容を学ぶ。</p>	<p>①多様な環境団体 ②持続する開発</p>	<p>①異なる世界や人の居場所にかかわる考えについて知識を深める。 ②自然と環境が人間にとって重要なことを理解する。 ③自然を尊重して行動し、持続する開発の原則を理解する。</p>

人間関係と道徳的な成長	<p>①生徒が価値観について話し、自分の意見の根拠を述べ、異なる意見を受け入れることを学ぶ。</p> <p>②生徒が信仰の自由とは何かについて学ぶ。</p>	<p>①価値観がどのように自分の生活に影響を与えるか。</p> <p>②自分の人生における責任と自由</p> <p>③信仰の自由</p> <p>④意見とその根拠</p>	<p>①異なる状況における規範と行動の道徳的正しさの評価能力をつける。</p> <p>②自分の原則に反して間違った行動をするということを理解する。</p> <p>③争いは非暴力で解決しなければならないことを理解する。</p>
自我と文化アイデンティティ	<p>①生徒が異なる人生観を知る</p> <p>②生徒が信仰、想像、知識と理解についての概念を学ぶ。</p>	<p>①多様な人生観</p> <p>②信仰、想像、知識、理解</p>	<p>①哲学的な問題を認識する。</p> <p>②教科の中心的な考え（人生観、文化、マイノリティ）を使いこなせる。</p> <p>③自身の見方を述べることができ、それについて説明ができればならないことを理解する。</p> <p>④自分の人生における思想の自由の意義を理解する。</p> <p>⑤多様な世界の文化の中でフィンランドらしさを理解する。</p>
社会と人権	<p>①生徒が平等、民主主義とは何を意味するかを学ぶ。</p> <p>②生徒が倫理的な問題を考えることを学ぶ。</p>	<p>①人権</p> <p>②多様な人権団体</p> <p>③平等とは、民主主義とは何か。</p> <p>④倫理的問題・モラルディレンマ</p>	<p>①人権、寛容、公正の原則を理解する。</p> <p>②共通の規則の意義を理解する。</p> <p>③個人の責任についてと個人が異なる社会に所属することを理解する。</p>

4-4 6年生のET

6年生の授業目的と内容は次のとおりである。内容は1から5年生のような項目に区別されず、より高度になる。

目 標	①生徒が意見とその根拠を述べる訓練を行う。 ②生徒が全体を把握する能力，日常生活の状況を分析する能力，自分が影響力を行使する可能性を知る能力を身につける訓練を行う。 ③生徒が人権と持続する開発の概念を学び，今日の問題と異なる文化について学ぶ。 ④生徒が日常生活におけるテクノロジーと知識の意義を考察する。
主 な 内 容	①国籍と望ましい社会 ②社会学的理論の根拠と民主主義 公正さ，義務，責任，平等，人権の発達，歴史 ③持続する開発，概念，自身が行う選択の意義 ④国民としての行動と政治 国民運動，国民社会，国民の組織などの概念 ⑤思想の世界 思想の歴史，思想の自由，西欧的思考の歴史 ⑤知識と研究 現代の世界のありようの変容 ⑥自然と超自然 超自然，聖なるもの，タブー，穢れ，神話，儀式，思想，無神論 ⑦信仰と不信仰 信仰と不信仰，カレヴァラの信仰，ラップ人とシャーマニズム， フィンランド人の非信仰的思考 ⑧自身の人生の考え 自分の人生と日常生活における疑問，倫理的疑問

4-5 教材の事例

3年生向けのETの教科書内容から「知識」と「頭脳」ということを考えるための教材を一例として以下にあげる¹⁰。子供の言葉で，理解しやすくかかれており，生徒自身を知るということを考えるように作成されていることがわかる。知っているとは何か，ということから始まり，脳の働きまでディスカッションするように組み立てられている。

『お父さんは何でも知っている』

(キーワード 知識 頭脳)

僕の父さんは何でも知っていると言ハネスがヤニに言った。

「本当？」

「知ってるって。自分でそういってるんだから。僕にうそいわないっていったよ。」
そこにサーラが加わった。

「ちょっとヨハネス，あんたのお父さんが知っているはずないよ。何でも知ってるなんてありえない。だって私の体重を知らないでしょ。私の身長だって知っているはずがない。つまり，たいして知ってないってこと。ぜったいに私たちがここで話していることなんて知らないんだから。」

「もうすぐ父さんが僕を迎えにくるから，僕の言っていることが本当だって会ったらわかるよ。」

「知っているって本当はどういうことな

の？」とヤニが熱心に考えはじめた。

「その答えはかんたんよ」とヨハンナが言った。「知るということって、つまり、先生が1足す1はいくつ？ときいたらだれかが2と答えるということでしょ。正しく答えたら知っているということなんだから。」

「じゃ、その生徒がさ、算数がとっても苦手で、あてずっぽうで正しい答えをいったとしたらどうなる？先生はそれではどうしてそうなるのってきかないといけないよね。そうしたらその生徒はこまるよ。みんなはその生徒を見て、こいつは本当は何にもわかってないやつなんだと思うからね」とヤニが言った。サーラもヤニと同じ考えだ。

「そうだよ。やっぱり、何かを知っているというなら、少しはどうしてか言えなきゃだめだよ。もし何かについてぜったいに知っているというのなら、そのせつめいできたほうがいいよ。」

「それでもまちがえることもあるよ。」とヤニがかんがえながら言う。「でも、自分のかんがえをせつめいできたら、それは本当に知ってるということに近いよね。じぶんのしゃべることについて少しでもわかってなきゃいけないよね。そういえば、お父さんとお母さんがけんかしてさ、1ヶ月にどれだけ食費がかかるかって。そのときお父さんがね。食費がかかりすぎだっていったの。そしたらお母さんがね。お父さんに1リットルのミルクがいくらするかも知らないくせに、なにに知っているの、って言ったんだよね。」

ヨハネスもヤニのいったことをかんがえはじめた。「うちの父さん、ミルクがいくらか知っているのかな？」

5. むすびにかえて

これまでに、私たちはETについてその目標と内容の概要を検討し、ETは、生徒が自然、環境、地球、宇宙、自分自身、他人、社会、理念等について学び、肯定的な人生観を形成することを目標としていることを見た。さらに自分自身の意見を形成し表現する能力を養い、同時に自分と異なる他人の意見、文化、宗教等にも耳を傾け、受け入れることを学ぶことも目標としていることを理解した。また教科書の内容については、事例は一例のみであるが、教材全体がこの目標に沿って非常に具体的に、生徒の言葉で、生徒の思考を促すように書かれていることがわかった。これらは、日本で理想と考えられているSEの範囲に近く、今後SEを開発していく上で、大いに参考となると考えられるので、今後も研究を深めていきたい。さらに、今後の研究の課題としては、フィンランドの学校、教会、行政が連携して精神的に青少年を支援し守ろうと構築しているセーフティーネットワークを取り上げていくつもりである。

それでは、キリスト教の教えに基づくUTではどのような授業を展開するのだろうか。最後に、UTとETの相違点について簡略に述べることでむすびにかえることにしよう。

UT授業の目標は、①キリスト教の基礎、聖書、福音ルーテル派教会、教会行事に親しむこと、②そのほかの宗教についても日常的な経験を通じて学ぶこと、③正悪に係る概念について考察すること、とされている。内容については、ETが4項目にまとめられているのに対して、UTは8項目に分かれて、それぞれ、①貴重でかけがえのない人生、②道

徳的成長, ④信頼と安全, ⑤ルーテル教会の生活, ⑥生徒を囲む環境, ⑦信仰のある世界, ⑧聖書の物語と教訓, というようにまとめられ, ④~⑧はキリスト教信仰を通じて道徳, 人生観を育成する内容になっている。授業は学校のある地区の教会との協力で行われ, 復活祭等, 生徒は教会の行事やミサに参加し, 聖職者の訪問授業も組み込まれている。このように, UTもETと教育目標は同じであるといえるが, UTではキリスト教を信仰として理解し, キリスト教の世界観にもとづき, 人生についての見方を養うことが強調されている点がETと大きく異なるといえよう。

本研究は平成18年度文部科学省科学研究費補助金を受けて行ったものである。

¹ たとえば, 得丸定子, カール・ベッカーらが継続して研究を行っている。

² 2000年と2003年に行われたOECDの国際学力調査で読解力1位などと評価されている。

³ 2006年8月17日にヘルシンキ市立メイラハティ小学校で聞き取り調査を行った。

⁴ 中等教育の高校や専門学校も教育は給食も含めて無料であるが, 教科書は自費で購入する。義務教育である小中学校は1年生から9年生と学年がつけられ, 9年で義務教育を終えることができなかつた生徒のため10年生も設けられている。一般に小学校は独立の校舎で, 中, 高は同じ校舎を使用していることが多い。

⁵ National Research and Development Centre for Welfare and Health "Suicide

Can Be Prevented". 13-15, Helsinki, 1993.

⁶ Statistics of Finland, 2006.

⁷ uskontotiede 直訳すると宗教学。

⁸ elämäkatsomustieto, 英語ではphilosophy of life または ethics, 直訳は人生哲学, または人生の見方。

⁹ 内容, 目標等については, メイラハティ小学校校長とET担当教員よりの聞き取り, メイラハティ小学校の教育計画, ETに使われる教科書をもとに作成した。Meilahden ala-aste Opetussuunnitelma 2006. Ala-asteen elämäkatsomustieto 1-3 & 3-6. Edita, 2003.

¹⁰ Ala-asteen elämäkatsomustieto 3-6. 13-14, Edita, 2003.

Spiritual Education in Finnish Elementary School

Machiko YAMADA

ABSTRACT

The Japanese education system is in crisis, and fundamental reforms are under heated discussion. With the appearance of such problems as bullying in school (which sometimes lead to children's suicide), refusal to go to school, and a fall in educational level and ability, the importance of the spiritual education has been emphasized.

In this study we examine the case of Finland, a country which is known for its high educational standard and students' academic ability. We look at the spiritual (ethical) education provided in a Finnish elementary school, and discuss its aims, the choice of contents and values affecting them. The aim of this report is to promote debate and present issues related to developing the spiritual (ethical) education in the Japanese educational system.

Key words : Finland, spiritual education, philosophy of life, school education